

17 嘔吐にて発症した上部空腸原発の小腸癌の1例

市川 寛・長谷川 潤・渡辺 隆興
岩谷 昭・清水 孝王・島影 尚弘
田島 健三

長岡赤十字病院外科

小腸癌は十二指腸に多く空腸原発例は比較的まれである。今回嘔吐と10kgの体重減少にて発症した上部空腸原発の小腸癌の1例を経験したので報告する。

症例は75才、女性。H20年7月頃より嘔気出現。H21年1月上旬になり嘔吐と体重減少が著明となり近医受診後精査目的にH21年1月下旬当院内科を紹介された。上部内視鏡検査にて十二指腸は拡張し下降部までは通過障害はないため以降の閉塞が疑われCT検査が行われた。CTにてTraitz靱帯の約30cm 肛門側の空腸に内腔に突出する様な造営結節を認め小腸腫瘍が疑われた。入院後のイレウス管挿入時の造影検査にて同部位にapple core様の狭窄像を認めた。上部空腸原発の小腸腫瘍の診断で外科転科後切除術が施行された。その病理検査でadenocarcinoma (tub2), pSE, int, INFb, ly1, v1, P3, n (+) 4/6, stage IVと診断され、現在大腸癌に準じFOLFOXによる化学療法を施行している。

18 後腹膜への穿通をきたした壊死型虚血性大腸炎の1例

八木 寛・萬羽 尚子・佐藤 友威
鈴木 晋・岡田 貴幸・青野 高志
武藤 一郎・長谷川正樹

県立中央病院外科

虚血性大腸炎の多くは保存的治療で軽快する非壊死型虚血性大腸炎であり、緊急手術を要する壊死型虚血性大腸炎は比較的まれとされている。今回我々は後腹膜への穿通をきたし、一期的に吻合し得た壊死型虚血性大腸炎の一例を経験したので報告する。

症例は76歳、女性。腹痛を主訴に来院し、下部消化管内視鏡で虚血性大腸炎と診断された。禁飲

食、補液による保存的治療を開始されたが、入院15日目に撮影したCTにおいて下行結腸の後腹膜への穿通を認め緊急手術となった。穿通腸管を切除し、一時的人工肛門造設は行わず一期的に吻合し得た。術後に縫合不全などの合併症は認めなかった。

19 術前診断で groove pancreatitis と診断された2例

森本 悠太・河内 保之・新国 恵也
西村 淳・牧野 成人・川原聖佳子
北見 智恵・加納 陽介

長岡中央総合病院 外科

Groove pancreatitis は十二指腸下行脚と膵頭部および総胆管の間の溝に局限する特殊な膵炎である。臨床的には十二指腸狭窄と総胆管狭窄による閉塞性黄疸で発症することが多い。Groove pancreatitis と診断され、保存的治療を行ったが、十二指腸狭窄が改善せず、手術を施行した2例を経験した、うち1例は切除不能の進行膵癌であった。本症ではダイナミックCT、MRIの早期相では濃染不良であり後期相で濃染してくるといふ、比較的特徴的な所見を呈するが、Groove領域に局限した膵癌との鑑別が重要である。症例を呈示し、文献的考察を加えて報告する。

20 胸腔鏡下腹臥位食道癌手術 — 新しい視野 —

桑原 史郎・片柳 憲雄・澤岬 安勝
前田 知世・赤松 道成・亀山 仁史
横山 直行・山崎 俊幸・大谷 哲也

新潟市民病院外科

【目的・方法】

2002年10月よりVATS-Eを導入し現在までに92例に施行した。2008年9月からは更なるStep upをめざし腹臥位のVATS-Eを導入し17例に施行した。今回この手技のビデオを供覧し、従来法との比較をする(ビデオ供覧)。

導入当初は左側臥位1モニタ・直視鏡で施行したが、hand eye coordinationが悪くまた気管左側